

わが国屈指の「交差点」—情報の十字路・播磨

古来、播磨は交通の要衝です。わが国屈指の「交差点」と言えます。

播磨を見る時、二つの地政学的な見方があります。畿内つまり首都圏からすると、播磨は、隣接してはいるが「遠く離れた畿外の国」です。一方、畿外の西国からは、都に最も近い「ほぼ畿内の国」に見えます。この二面性を持った播磨には、東西南北いずれの方向からも道を通じ、ヒト、モノ、カネが盛んに行き交う“情報の十字路”が形成されています。

播磨を東西に貫く最大の動脈は「山陽道」です。日本初の官道「古代山陽道」がそのルートです。播磨地域は、最重要区間として「大路」とされました。中世には赤松氏の躍動を支え、羽柴(豊臣)秀吉・黒田官兵衛の中国大返しを可能にし、近世には西国將軍・池田輝政の西国支配ルートとなります。西日本はもちろん、列島全域の文化交流・経済発展を強く促す「国家基盤を支える大動脈」と位置づけられます。

一方、北からは「美作道」、「因幡街道」、「但馬道」、「丹波街道」という4本の道が播磨で合流しています。

美作、因幡からの道は、古代には鉄を運ぶ重要ルートとなり、中世には後醍醐天皇の建武の新政を支えた道でもあります。逆に赤松躍動期には、反新政勢力を育て、新時代の波を運ぶ革新ルートにもなりました。「未来を拓く鉄の道、悪党の道」といえます。

但馬道は、日本海と瀬戸内を結ぶ最短コースです。『播磨国風土記』が描くように、古来、盛んな往来があり、多くのエピソードも残しています。近代には、生野銀山からの鉱石運搬ルート—「銀の馬車道」も整備され、明治の近代化を推し進めました。南北文化交流の道であると同時に「富国への道」ともいえます。丹波街道は、北播磨から丹波を抜け京都に通じます。こちらは首都への最短コース「都へのショートカット」となります。

異色の道として、有馬温泉に通じる道—「有馬道(湯の山街道)」があります。秀吉らが生かしばしば利用したといわれますが、これは、レジャー街道、あるいは「癒しの道」とも言えるかもしれません。

また、この調査報告書では触れていませんが、もう一つ「海路」があります。瀬戸内に面した播磨の海岸部は、海の重要拠点でもあるのです。はるか渡来人の昔から、日本に先端文明をもたらし、以後、重要な物資流通ルートとなったほか、多くの文人、要人たちも盛んに往来しています。この海上の道は、「海の山陽道」なのです。

このように、播磨では多くの主要街道が交差しています。これほど多くの古道が行き交い、今につながっている地域は、首都圏など一部を除くと、ほとんどありません。情報の十字路—古道・街道の機能と歴史、現状等を見直すことで、その道の先に、播磨の活性化を図る新たなヒントが見えてくるはずです。

監修 兵庫県立大学特任教授 播磨学研究所所長
中元孝迪